

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12668

研究課題名（和文）エルサレム会議のデザイン史研究 現代社会の課題に対応力のあるデザインを求めて

研究課題名（英文）A Design Historical Study of the Jerusalem Committee: In Search of Designs Responsive to the Challenges of Contemporary Society

研究代表者

近藤 存志（Kondo, Ariyuki）

東洋大学・福祉社会デザイン学部・教授

研究者番号：00323288

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：第3次中東戦争が停戦をむかえると、エルサレムの近代化を議論するエルサレム会議が発足した。この会議には、建築、都市計画、神学、哲学、芸術、経済、法律など、異なる分野の学識経験者が世界各国から招聘され、その傘下にはエルサレム会議都市計画小委員会が設置された。同小委員会では、一部の高名な建築家や都市計画家たちが、エルサレムの宗教的、文化的、歴史・考古学的な記念碑性を前面に出した計画の立案を主張したが、エルサレムの近代化が学際的で国際的な枠組みの中で議論されたことの意義は大きく、エルサレム市民が日常的に直面している現実問題の改善を図る現実的な視点が計画全般に貫かれることになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

エルサレム会議とその傘下に設置されたエルサレム都市計画小委員会は、エルサレム市の宗教的、文化的、歴史・考古学的な記念碑性を認識しつつも、その近代化計画においては市民が日々直面している現実問題を具体的に改善し「生きた（成長する）都市」として開発する姿勢を鮮明にした。建築・都市計画をめぐる諸問題は、多分野を横断する学際的な枠組みの中で扱われることによって、住民の現世的・世俗社会的利益の確保と維持・促進に寄与しようとする視点が強化されることを、エルサレム会議で繰り広げられた議論は示している。

研究成果の概要（英文）：In 1969, the Jerusalem Committee was set up in order to discuss the future urban development of the city of Jerusalem. The Committee consisted of some seventy renowned international experts from different fields: theology, philosophy, architecture, urban planning, art, journalism, law, etc., and the Townplanning Subcommittee was also set, inviting representative figures in architecture and urban planning. The majority of the Subcommittee members were hugely fascinated by Jerusalem's authentic and Orientalist aura, and thus overly emphasized the city's symbolic and spiritual significance. It is, however, noteworthy that the Jerusalem Committee attempted the modernization of the historical city by taking seriously into account civil concerns, the practical, daily needs of the citizens of Jerusalem. This was the outcome of the interdisciplinary nature of the Jerusalem Committee, capable of detaching its discussions from current fashion and trends in architecture and urban design.

研究分野：デザイン史、イギリス芸術文化史、イギリス建築史

キーワード：デザイン史 エルサレム会議 ニコラウス・ペヴスナー 西洋建築史

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の着想は、筆者が米国ゲッティ研究所附属図書館の貴重文書コレクションが所蔵するニコラウス・ペヴスナー文書 (Pevsner Papers, Special Collection, Research Library, Getty Research Institute) の中に、エルサレム会議に関する多数の未公開資料が含まれていることを知ったことから始まった。

エルサレム会議は、第三次中東戦争の停戦後まもなく開始されたエルサレム市の近代化計画について、学際的で多国籍的な枠組みの中で議論し、エルサレム市長テディ・コレックに諮問する組織として1969年に発足した。

ペヴスナー文書には、この会議の傘下に設置されたエルサレム会議都市計画小委員会の活動概要報告書が保管されている。その記述からは、世界各地から招聘された建築家、都市計画家、芸術家、そして美術史・デザイン史研究者たちが、紛争都市エルサレムの平和で近代的な発展をどのように実現するか、各自の専門的な知見に基づいた真剣な議論がなされたことがうかがえる。20世紀の建築・デザイン・芸術界を牽引していた人びとが一堂に会し、紛争都市の将来をめぐって率直に議論したこの会議は、「近代における社会改革の手段としてのデザインの可能性」「デザイン研究の学際性の実証」「個別具体的なデザイン事業について多国籍的視点から議論することの意義」等について、デザイン史研究の視点から考える最良のケース・スタディになると思われた。

## 2. 研究の目的

本研究は、エルサレム会議の設立目的、組織体制、活動歴を整理したうえで、エルサレム会議都市計画小委員会の参加者の主張や、参加者間で交わされた書簡の中に残る同会議に関する記述などに注目し、建築・都市計画・デザインの観点からエルサレムの近代化がどのように議論されたのか会議の全容を明らかにすることを目的としていた。また、国際的な枠組みの中で「社会改革の手段としてのデザイン」について議論した野心的な試みとして、エルサレム会議の取り組みのモダン・デザイン史的意義の把握をめざした。

## 3. 研究の方法

本研究では、イスラエル国立図書館イスラエル関連コレクション、エルサレム市公文書館、そして米国ゲッティ研究所附属図書館貴重文書コレクションに所蔵されているエルサレム会議関連の資料を用いた。ゲッティ研究所が所蔵するペヴスナー文書には、エルサレム会議都市計画小委員会の委員長を務めたニコラウス・ペヴスナーが生前収集・保管していたエルサレム会議都市計画小委員会の会議録や関連の一次資料、エルサレム近代化構想にかかわる各種報道記事の切り抜き、そしてエルサレム会議をめぐるペヴスナーとエルサレム市長テディ・コレックの交流の詳細がよくわかる書簡等が含まれている。本研究では特に、こうしたペヴスナーが収集していた資料を重視した。

## 4. 研究成果

### (1) 第3次中東戦争の停戦とエルサレムの近代化構想

1967年6月に勃発した第3次中東戦争(6日間戦争)が停戦をむかえると、エルサレム市長テディ・コレックはイスラエルの統治下となったエルサレム市内の生活環境の改善をめざして市街地の拡張・再開発に着手し、この事業の基本計画は、1968年に発表された。

この基本計画には、スラム地区の環境、増加する移住者、市内で増加する車両の数と不十分な道路網、市中心部の人口過密、新興住宅地区における雇用不足、産業誘致に向けた用地不足といった実際の諸問題への対策と、「新たな雇用の創出」、「既存のコミュニティの枠組みを維持しながら社会格差の是正実現」、「市内に残る歴史遺産と新たに計画建設する地区や施設を一体化させることで、エルサレムが『墓碑の博物館』(a museum of gravestones)と化すことを防ぐこと」といった方針が盛り込まれた。

1969年、コレックは、この基本計画案について国際的な知見を集約し、最終案として確定させることをめざして、自身が諮問する会議体としてエルサレム会議(The Jerusalem Committee)を発足させた。この会議には、建築、都市計画、神学、哲学、芸術、経済、法律など、異なる分野の学識経験者約70名が世界各国から招聘された。

そのうちの40名ほどが参集した第1回エルサレム会議は、1969年7月に開かれ、第2回会議が1973年6月、第3回会議が1975年12月に開催された。

### (2) 第1回エルサレム会議とエルサレム会議都市計画小委員会の発足

第1回エルサレム会議では、「エルサレム市を『博物館』『演劇の舞台』のような状態にしてはならない」こと、それは日々新たな課題に直面し解決しながら発展する「生きた(成長する)都市(a living city)であり続けなければならない」こと、そして「非常に多岐にわたるエルサレム市が『抱えている現実の問題』(facts)について、調査・検討がなされなければならない」ことが確

認められた。また、都市計画上の具体的な課題について専門的な見地から議論することのできるエルサレム会議都市計画小委員会(The Jerusalem Committee Townplanning Subcommittee)の設置が提案された。これを受けて市長コレックは、都市計画小委員会の設置を決定、ルイス・カーン(建築/米国)、フィリップ・ジョンソン(建築/米国)、ブルーノ・ゼヴィ(建築/イタリア)、バックミンスター・フラー(デザイン・建築/米国)、ヴェルナー・デュットマン(建築・都市計画/ドイツ)、イサム・ノグチ(彫刻・環境デザイン・デザイン/米国)、ヤコブ・バケマ(都市計画・建築/オランダ)、ペドロ・ラミレス・バスケス(建築・デザイン/メキシコ)、ローレンス・ハルプリン(環境デザイン/米国)、ニコラウス・ペヴスナー(建築史・デザイン史/イギリス)、リチャード・マイヤー(建築/米国)、ルイス・マンフォード(都市論・文明史・技術史/米国)、ヘンリー・ムーア(彫刻/イギリス)ら、建築・都市計画・芸術関連諸分野の専門家 31 名に委員を委嘱した。このうち同委員会の委員長への就任を要請されたのは、ニコラウス・ペヴスナーであった。

エルサレム会議都市計画小委員会の第 1 回会合は、「エルサレム 過去と未来」と題して、1970 年 12 月に開催された。

### (3) 1968 年基本計画案への批判

エルサレム会議都市計画小委員会の参加者の多くは、エルサレムの宗教的、文化的、歴史・考古学的な記念碑性に唯一無二の価値を見出していた。そしてエルサレムが、当時西側先進諸国に溢れていた「巨大な駐車場と高速道路に覆われた近代都市」となることに強く抵抗した。

ルイス・カーンは、1968 年に発表された基本計画案には「ヴィジョン、精神、テーマ、そして個性すらない」と批判し、基本計画全体を貫く「統一テーマ・原理原則」<sup>2</sup>をまず策定することの重要性を主張した。フィリップ・ジョンソンは、米国建国時の指導者たちを引き合いに出して、イスラエルの人びとがエルサレムの将来を構想するうえで、もっと常識に囚われない「遠大な夢」を持つべきであると演説した<sup>3</sup>。

都市計画小委員会の会合に対面で出席することができなかったルイス・マンフォードは、会前に先立って、「エルサレムのための計画に関する備忘録」<sup>4</sup>を準備して、その中でエルサレムは「世界の首都にならなければならない」、その「経済的な発展、産業の振興、政治的機能の拡大は強く抑制されるべき」で、「エルサレム近郊の人口を制限し、エルサレム市を宗教的・教育的中心として発展させることに注力すべきことは明白である」と主張した。

彼らは一様に、エルサレムの記念碑性を最重要視して、利便性と経済性を追求したモダニズム色の強い 1968 年立案の基本計画案に対しては否定的だったのである。

しかしそれでも、都市計画小委員会の第 1 回会議終了後に発表された声明には、モダニズム色の強い 1968 年基本計画案を激しく批判するような文言は盛り込まれなかった。むしろ「偉大な都市の拡張・整備計画がまるで進化を遂げるかのように生み出され、機能的、社会的、経済的、感情的、そして象徴的な社会問題を十分に踏まえることで、徐々にそれらの諸問題の(総合的)合意に到達することができるような、確固たる計画指針を打ち立てる必要がある」<sup>5</sup>との指摘が明記され、実際にエルサレムに住む市民が日常的に直面している現実の生活環境にかかわる諸問題が過小評価されてしまうようなことがないように、配慮がなされた。

### (4) エルサレム会議都市計画小委員会委員長ニコラウス・ペヴスナーの視点

エルサレム会議都市計画小委員会委員長を務めたペヴスナーは、1930 年代初頭以来、建築をはじめとする人間のデザイン行為全般に、一般市民の日常生活の質を向上させるのに果たし得る積極的な役割があることを一貫して主張していた。

ペヴスナーは 1942 年、ナチス・ドイツの建築を批判する文章を発表し、その中でヒットラーが 1938 年、第 1 回ドイツ建築工芸展の開会式典において行った演説に言及した。ヒットラーはこの演説で、「人びとの日常生活にかかわる必要を遙かに超越する壮麗な建築物」を「真に偉大な建築物」と讃え、その一方で「人びとの日常生活の瑣末な仕事や必要のために建てられ、使用されるような建築物」の価値を完全に否定した<sup>6</sup>。ペヴスナーは、ヒットラーのこうした建築観を批判し、大衆の日常生活における必要と要求を黙殺して、ただひたすら壮麗・壮大な記念碑性の表現を希求することの愚かさを、厳しく断罪した。

それから約 10 年後、1947 年に BBC 系のラジオ局第 3 プログラムで「ワシントンの建築」と題したラジオ講義を行った際にも、ペヴスナーは、合衆国の首都建設において、そこに住み働く市民たちの日常生活の実態をまったく考慮することなく、過剰なまでに遠大な記念碑性の実現が追求されたことを批判した。

エルサレム会議都市計画小委員会においてもペヴスナーは、市民生活の現実と乖離しているような概念的なテーマや原理・理論を重視すること、そして遠大な構想を掲げることに著しく懐疑的だった。

カーンやジョンソン、マンズフィールドらの見解を意識してか、ペヴスナーは第 1 回小委員会終了直後、コレックに書き送った手紙の中で、小委員会の構成メンバーについて「あなたの人選は素晴らしいと思いました。ただ原理・理論に偏向している人たちがやや多すぎて、現実性に目を向ける人たちが足りませんでした。」<sup>7</sup>と記している。

原理・原則に偏向することの危険性を確信し、エルサレムに住む市民の現実を重視したペヴスナーの目には、利便性と経済性を追求した 1968 年発表の基本計画は決して否定されるべきもの

ではなかった。ペヴスナーは、この同じ手紙の中で、1968年基本計画案の内容は「実際は優れたもの」<sup>8</sup>であったことを認めている。

コレックも、ペヴスナーと同様、エルサレム市民が日常的に直面している現実を直視し、現況の改善と実効性のある問題解決施策の提案を重視していた。それゆえ原理・理論に偏向してしまっている人たちが、エルサレム市民の必要と要求を軽んじていると感じた際には、コレックは「自分たちは大きな自動車を喜んで乗り回しておきながら、エルサレムのわたしたちには驢馬の背に跨って生活することを求めるとは、何と不条理なことか」<sup>9</sup>と述べて、苛立ちを露わにした。

#### (5) 居住、労働、教育、余暇 住民の現世的利益の保全・維持・促進

近代建築国際会議(CIAM)は、1959年の会議をもって解散し、モダニズムの影響力は急速に薄れて、1970年代初頭の西側先進国ではモダニズム一辺倒の近代都市建設は既に魅力を失っていた。自動車による高速移動を基準に構想された同じような近代都市が、世界各地で繰り返し建設され続ける現実、カーンやジョンソンをはじめ、当代を代表する建築家、都市計画家たちは嫌気がさしていた。

それでもエルサレムの近代化計画が、建築・都市デザインの流行に敏感な一部の高名な建築家や都市計画家たちの主義主張に引っ張られなかったことは重要である。近代化計画が学際的で国際的な枠組みの中で議論されたことで、建築界の潮流に囚われない、きわめて現実的な視点が会議に活かされたのだった。

たとえば、1973年6月、第2回エルサレム会議が会議終了時に採択した決議には、次のような指摘が盛り込まれた。

本会議は、エルサレム市に居住するさまざまな集団の生活水準を高め、社会的格差を埋めるための、継続的な努力が必要であることを認識する。東エルサレムにおける改善された公的サービス、住宅、福祉、下水などの提供が、優先的に取り組まれていることは、心強いことである。エルサレム会議は、自治体当局がこれらの問題における責任を自覚し、これらの問題にかかわるいくつかの事業がすでに着手されていることを評価し、ここに書き留めておきたい。<sup>10</sup>

都市計画小委員会の提言によって設けられたエルサレムの主任都市計画家のポストに任命されたナサニエル・リッチフィールドは<sup>11</sup>、この第2回エルサレム会議の全体会議を前に、「エルサレムの精神性と性格に適した都市計画」(‘Planning for the Spirit and Character of Jerusalem’)と題した梗概を作成していた。リッチフィールドはその中で、エルサレムの一般市民の実践的な必要・要求に的確に応えようとする機能主義の視点の大切さを強調している。

エルサレムの都市計画では、2つの異なる視点を、念頭に置いておかなければならない。第1に、エルサレムは、他の都市と同様、人びとが洗練された方法で居住し、働き、教育を受け、余暇を楽しむことができる場所であるべきであるということ。そして第2に、世界中で、そして歴史を通じてこれまで見做されてきたとおり、エルサレムは、特別な精神性と性格を持つ都市である、ということである。<sup>12</sup>

「特別な精神性と性格」を持つ都市エルサレムであっても、まず第1に、他の近代化が図られてきた都市の場合とまったく同様に、居住、労働、教育、余暇にかかわる住民の現世的利益の保全と維持、促進を達成しなければならない、というのである。

#### (6) 機能主義の実践と寛容の問題

ペヴスナーはエルサレム会議都市計画小委員会の委員長として招聘を受ける10年以上前の1955年秋、BBCラジオで計7回におよぶシリーズ講演「リース記念講演」を担当し、その第3講演の中で、「それぞれの場所を『それぞれのメリットにもとづいて』扱う」(‘treat each place “on its own merit”’)という「行動原理」に着目していた。

ペヴスナーは、それを人間の行動に「寛容の原理が適用されたもの」<sup>13</sup>と説明した。

ペヴスナーによれば、ここで言う「寛容の原理」の源流は、ジョン・ロックが1689年に、無血革命直後のイングランド社会を強く意識して著した『寛容に関する書簡』(Epistola de Tolerantia, Gouda, 1689 / A Letter Concerning Toleration, London, 1689)にあった<sup>14</sup>。

ロックは『寛容に関する書簡』の中で、「生命、自由、健康、身体的苦痛からの解放、そして貨幣、土地、家屋、家具等の外的な事物の所有」<sup>15</sup>といった「[人間の]現世的利益」は、各人の信仰・信条の差異にかかわらず、政治的共同体とその為政者の寛容な態度によって保護・保全、維持、促進されなければならないことを指摘した。

この寛容の論に照らせば、「政治的共同体」であるエルサレム市当局とその「為政者」としてのエルサレム市長が果たすべき役割は、エルサレムを聖地とみなす宗教と結びついた宗教性や民族・歴史的な記念碑性の強調や表現を実現することではなく、市民の「現世的利益」を確保、保全し、維持、促進させることであった。

宗教的、民族的背景や、政治信条の異なる複数の集団が集住する共同体としてのエルサレム市

を、カーンやジョンソンが主張したような概念的な統一テーマや原理原則、遠大な構想の下に一体的に整備・開発することは、異なる宗教と慣習を持つ多様性に富んだエルサレム市民の日常生活における自由や権利、必要、現世的な福祉をひどく軽視する恐れがあることは明白であった。建築家も都市計画家も、現世的な利益や所有について個人あるいは共同体が保持する自由のために働くべき存在であり、特定の主義主張・構想の遂行を企てることは、その職責を放棄していることに等しかった。都市の近代化を実現しようとするうえで、彼らがなすべき仕事は、自分が正しいと信じる主義主張や構想への従属を不特定多数の市民・住民に強いることでは決してなく、その都市に生活する不特定多数の人びとの日常活動に可能な限り適した生活環境、すなわち無数の名も無き市井の人びとのために機能する社会をデザインすることであった。

エルサレム会議(エルサレム会議都市計画小委員会を含む)は、エルサレムを「墓碑の博物館」「演劇の舞台」とすることなく、「生きた(成長する)都市」として計画し、市井の人びとの生活の必要を満たすことにあくまでも主眼を置いた。そうした姿勢の根底には、建築家・デザイナーの仕事の真価は、その壮麗さや建築論的革新性の提示・実現によらず、市民・住民の生活上の多様な要求と必要に機能的に応え得ているか(それぞれの場所を「それぞれのメリットにもとづいて」扱っているか)という一点において測られるべきである、との信念があったと言えよう。

16

<sup>1</sup> ‘Planners under Fire’, *Jerusalem Post*, December 25, 1970.

<sup>2</sup> Cf. ‘Experts condemn plan for rebuilding Jerusalem’, *The Times*, December 24, 1970.

<sup>3</sup> Richard Meier, ‘Planning for Jerusalem’, *Architectural Forum*, April 1971, p. 56.

<sup>4</sup> Lewis Mumford, ‘Memorandum on the Plan for Jerusalem’. <https://placesjournal.org/article/lewis-mumford-on-the-plan-for-jerusalem/> (Accessed May 19, 2023)

<sup>5</sup> ‘Final Statement: The Jerusalem Committee Townplanning Subcommittee, December 19-21, 1970’, p. 2.

<sup>6</sup> P. F. R. Donner (N. Pevsner), ‘Criticism’, *The Architectural Review*, vol. XC, no. 540, 1941, p. 177.

<sup>7</sup> コレックに宛てた 1970 年 12 月 28 日付のペヴスナーの書簡より。(The Getty Research Institute, Research Library, Special Collections)

<sup>8</sup> 同上。

<sup>9</sup> Sandy Isenstadt and Kishwar Rizvi, eds., *Modernism and the Middle East: Architecture and Politics in the Twentieth Century*, Seattle: University of Washington Press, 2008, p. 169.

<sup>10</sup> ‘Resolutions Passed by the Second Plenary Session of the Jerusalem Committee’, June 1973, p. 2.

<sup>11</sup> ペヴスナーは、「リッチフィールド以上に優れた都市計画家を見つけることは不可能だったでしょう」と述べて、都市計画家として機能主義の姿勢に忠実だったリッチフィールドのエルサレム市主任都市計画家への就任を高く評価した。ペヴスナーがコレックに宛てた 1973 年 7 月 16 日付の手紙より。(The Getty Research Institute, Research Library, Special Collections)

<sup>12</sup> Nathaniel Lichfield, ‘Planning for the Spirit and Character of Jerusalem’, 1973, p. 9. The Isamu Noguchi Archive, <https://archive.noguchi.org/Detail/archival/51505> (Accessed June 26, 2021)

<sup>13</sup> Nikolaus Pevsner, *The Englishness of English Art: An Expanded and Annotated Version of the REITH LECTURES Broadcast in October and November 1955*, London: The Architectural Press, 1956, p. 168. ニコラス・ペヴスナー『英国美術の英国らしさ 芸術地理学の試み』蛭川久康訳、研究社、2014 年、186 頁。訳文は一部改変した。

<sup>14</sup> Pevsner, *The Englishness of English Art*, pp. 168-77. ペヴスナー『英国美術の英国らしさ』、186-87 頁。

<sup>15</sup> ジョン・ロック『寛容についての手紙』加藤節、李静和訳、岩波書店、2018 年、20 頁。

<sup>16</sup> 1933 年のバウハウスの閉校を受けて、アリエ・シャロンをはじめ、数多くのユダヤ人のモダニズム建築家・デザイナーがイギリス委任統治領パレスチナへ移り住んで、一帯はモダン・デザインの一大中心地となった。1948 年 5 月、イスラエルが建国された後も、モダン・デザインは国内至る所であらゆる種類の建築物に採用され続けた。エルサレム近代化基本計画の策定にかかわったユダヤ人建築家・都市計画家たちのデザイン思考の根幹部分には、グロピウスが次のように言い表したバウハウスの創造精神が息づいていない。

人はいかに居住し、いかに働き、動き回り、くつろぐのか。そしてどうすれば生命を与える環境を造り出すことができるのか。 こうした事柄で我々の頭は一杯だった。( Nikolaus Pevsner, *Architecture as a Humane Art: The 1972 Raoul Wallenberg Lecture*, Ann Arbor, MI: College of Architecture and Design, The University of Michigan, 1972, p. 35. )

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 近藤存志	4. 巻 14
2. 論文標題 「デザインと寛容の問題 N・ベヴスナー、J・ロック、そしてエルサレム会議から考える」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪大学大学院文学研究科美学研究室編 『a+a 美学研究』	6. 最初と最後の頁 100-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ariyuki Kondo	4. 巻 N/A
2. 論文標題 “Capability of Design for ‘Modernizing’ the Memories of History: The Jerusalem Committee’s Ambitious Challenge”	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 “Memory full? Reimagining the relations between design and history”, FHNW Academy of Art and Design, Basel, Switzerland	6. 最初と最後の頁 193-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.26254/med/6342	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ariyuki Kondo	4. 巻 N/A
2. 論文標題 “The Jerusalem Committee, an Ambitious Multinational Exercise: An Aesthetic Journey to the Physical Beauty and Spiritual Unity of a Divided City”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Possible Worlds of Contemporary Aesthetics: Aesthetics Between History, Geography and Media Proceedings of the 21st International Congress of Aesthetics	6. 最初と最後の頁 1641-1649
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 近藤存志	4. 巻 N/A
2. 論文標題 「戦禍の中での福祉社会の実現とモダン・デザインの意味ー第3次中東戦争停戦後のエルサレムの試み」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 藝術学関連学会連合ホームページ <a href="http://geiren.org/news/2023/program05.html">http://geiren.org/news/2023/program05.html</a>	6. 最初と最後の頁 N/A
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 近藤存志
2. 発表標題 「戦禍の中での福祉社会の実現とモダン・デザインの意味 第3次中東戦争停戦後のエルサレムの試み」
3. 学会等名 藝術学関連学会連合第17回公開シンポジウム「芸術と平和 / 戦争」（広島・広島平和記念資料館）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ariyuki Kondo
2. 発表標題 “Capability of Design for ‘Modernizing’ the Memories of History: The Jerusalem Committee’s Ambitious Challenge”
3. 学会等名 Design History Society Annual Conference 2021 (Virtual Conference), FHNW Academy of Art and Design, Basel, Switzerland (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ariyuki Kondo
2. 発表標題 “Sir Nikolaus Pevsner’s Resistance to Authoritarianism in Twentieth-Century Architecture: A Study of the Jerusalem Committee”
3. 学会等名 “Disturbing Views: Visual Culture and Nationalisms in the 20th and 21st Centuries”: Virtual Conference (Faculty of Art, Design & Architecture, University of Johannesburg, Johannesburg, South Africa) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ariyuki Kondo
2. 発表標題 “From Habitat 67 to Jerusalem: Moshe Safdie’s Modernist Journey”
3. 学会等名 SAH 2021 Montreal: 74th Annual International Conference of the Society of Architectural Historians (University of Montreal, Montreal, Canada / SAH 2021 Virtual Conference) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ariyuki Kondo
2. 発表標題 “ The Jerusalem Committee, an Ambitious Multinational Exercise: An Aesthetic Journey to the Physical Beauty and Spiritual Unity of a Divided City ”
3. 学会等名 ICA 2019 Belgrade: 21st International Congress of Aesthetics (Faculty of Architecture, University of Belgrade, Belgrade, Serbia) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 近藤存志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教文館	5. 総ページ数 147
3. 書名 『ゴシック芸術に学ぶ現代の生きかた N. ペヴスナーとA. W. N. ピュージンの共通視点に立つて』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------